

奥ノ田頭遺跡発掘調査報告

— 三重県度会郡南伊勢町贊浦所在 —

2014（平成26）年2月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、三重県度会郡南伊勢町に位置する奥ノ田頭遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、一般国道260号南島バイパスの建設事業で、三重県教育委員会が三重県県土整備部からの経費の執行委任を受けて実施した。
- 3 発掘調査期間及び面積は下記のとおりである。

平成23年 9月14日	～	平成23年12月26日	563m ²
平成25年 4月 8日			20m ²
- 4 発掘調査の体制は次の通りである。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター		
整理担当	三重県埋蔵文化財センター		

平成23年度	調査研究Ⅰ課	主幹 中井 良和	主査 大川 操
平成25年度	調査研究Ⅰ課	主査 谷口 文隆	

平成24年度	調査研究Ⅰ課	主査 星野 浩行	
平成25年度	調査研究Ⅰ課	主査 谷口 文隆	

発掘調査作業受託	平成23年度	朝日商会（土工委託）	
	平成25年度	谷口土木（労務提供）	
- 5 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備室、伊勢建設事務所、及び南伊勢町教育委員会、また海の博物館平賀大蔵学芸員、文化財保護指導員からの多大な協力を得た。
- 6 報告書の執筆は星野・大川・谷口が、遺物写真撮影は大川が行った。全体の編集は星野・谷口が行った。
- 7 報告書作成にあたって、愛知学院大学教授 藤澤良祐氏、東京大学准教授 堀内秀樹氏、滋賀県教育委員会 畑中英二氏、海の博物館学芸員 平賀大蔵氏からご教授いただいた。
- 8 本書で使用した地図は国土地理院発行の1/25,000地形図、一般国道260号線南島バイパス建設事業の工作図面である。
- 9 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。
- 10 本書では以下のように遺構の略記号表記を使用している。

S D : 溝	S K : 土坑	S R : 道路	S Z : その他遺構
---------	----------	----------	-------------
- 11 出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。なお遺物の写真図版は縮尺不同である。
- 12 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章	前　　言	1
第2章	位置と環境	3
第3章	遺　　構	5
第4章	出土遺物	10
第5章	結　　語	14

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1:50,000)	2
第2図	遺跡周辺図(1:5,000)	4
第3図	調査前測量図(1:400)	6
第4図	遺構平面図(1:200)	7
第5図	S Z 1 遺物出土状況図(1:4)	8
第6図	調査区南北土層断面図(1:100)	8
第7図	平坦面2 東西土層断面図(1:100)	9
第8図	平坦面1 東西土層断面図(1:100)	9
第9図	出土遺物実測図	11

表目次

第1表	出土遺物観察表1	12
第2表	出土遺物観察表2	13

写真図版目次

図版1	調査前風景	15
図版2	平坦面1、平坦面2 調査後全景	16
図版3	平坦面3、第2次調査後全景	17
図版4	個別遺構等	18
図版5	出土遺物1	19
図版6	出土遺物2	20

第 1 章 前 言

1 調査に至る経過

国道260号線は、志摩市阿児町から北牟婁郡紀北町紀伊長島を結ぶ、総延長約120kmにおよぶ一般国道である。路線の多くの区間が南伊勢町内の熊野灘沿岸を通って横断するが、一部に狹隘な区間が残存するため、各地区にバイパス建設や拡幅工事がなされている。今回の事業では範囲内に所在する周知の遺跡はなかったが、事前の分布調査を通じて遺跡の存在が確認された。当初この遺跡は、表土採集遺物や地形から判断して、繩文時代と中世(城館跡)の遺跡と考えられたため、県土整備部との協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成23年度の調査ではそのうち563m²について発掘調査を実施した(第1次調査)。また、平成25年度には20m²について工事立会の形式で調査を行った(第2次調査)。

2 文化財保護法等に関する諸手続

○文化財保護法第97条第1項

「遺跡の発見通知」

(県教育委員会委員長あて)

埋蔵文化財センター所長通知)

平成20年5月14日付 教埋第71号

○三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

(県教育委員会委員長あて三重県知事通知)

平成25年3月5日付 伊建第1951号

○文化財保護法第99条第1項

(県教育委員会教育長あて)

埋蔵文化財センター所長通知)

平成23年9月22日付 教埋第174号

○文化財保護法第100条第2項

「埋蔵文化財の発見・認定について(通知)」

(伊勢警察署長あて県教育委員会委員長通知)

第1次調査分

平成24年1月16日付 教委第12-4416号

3 調査経過

2011(平成23)年

9月14日 契約業務の開札。朝日商会が落札。

第1次調査開始。調査前測量。

10月7日 調査前写真撮影を実施。

重機による抜根・表土除去の開始。

予想以上に法面が旧傾斜となり、転落防止の安全対策を講じる。

10月14日 旧山道が確認される。

10月24日 人力による包含層削除開始。堆積が厚く、苦労する。土鍤などが出土。

11月14日 平坦面3より寛永通宝など11枚出土。

11月16日 土層断面図写真撮影、実測も開始。

11月25日 人力掘削終了。

11月30日～12月1日

調査区全景写真撮影。

12月6日 遺構実測等終了、現地調査終了。

2013(平成25)年

4月8日 第2次調査実施。

4 発掘調査と記録の方法

(1) 地形測量

まず、発掘調査に入る前に、現況の把握のために調査対象範囲の地形測量を実施した。地形測量は、斜面地がかなりの急傾斜であるため、作業の効率や安全性を考慮し、専門機材・技術を保有する民間機間に委託して行った。調査前地形測量図は1/200の縮尺で作成し、等高線は20cm間隔で表記している。

また遺構の掘削が終わった段階で、調査区内の地形測量を実施した。この地形測量図も民間機間に委託して作成し、1/100の縮尺、等高線は20cm間隔で表記している。

(2) 地区設定

調査区内におけるグリッドは4×4mで設定しており、西から東へ数字を、北から南へアルファベットを与え、各北西角をグリッド名称とした。東西はA～D、南北はI～Qの範囲となる。

なお、第2次調査については、グリッドを設定していない。

(3) 遺構図面

第1次調査について、遺構検出段階でグリッド単位の1/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに1/100の遺構配置図を作成することで、調査区全体の遺構配置を把握した。遺構平面図・土層断面図については1/20で手書き実測を行った。第2次調査の遺構平面図については1/50で行った。

なお、これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。

(4) 出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構の区別を行い、小地区単位で取りあげている。また報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と未掲載遺物（B遺物）

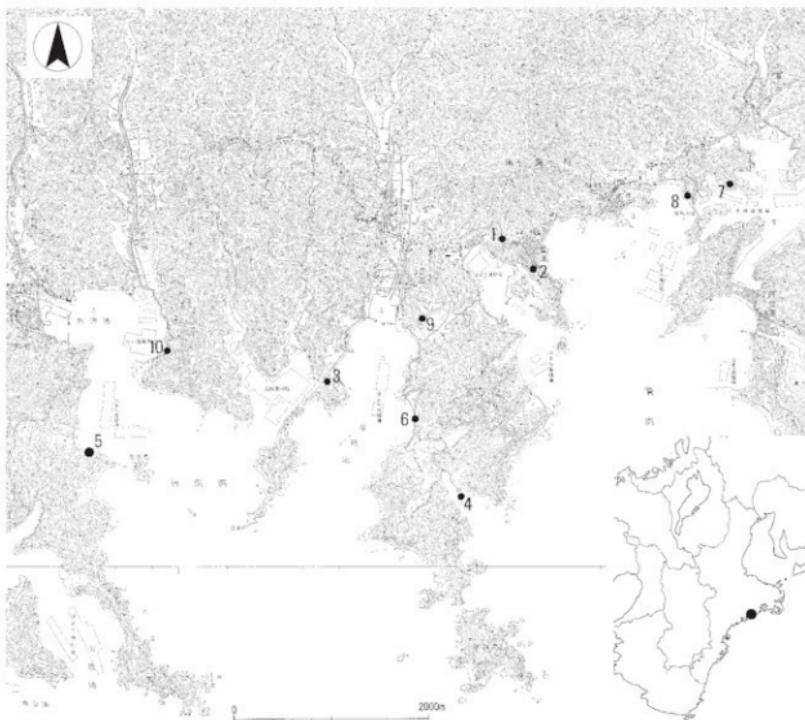
に区分して整理し、保存している。

(5) 写真撮影

遺構関連の写真では、調査区全景写真は4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）とプローニーの6×9判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影した。また調査前状況や調査の進捗状況、遺構、土層などの撮影は35mm判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影した。使用したカメラは4×5判と6×9判ではウィスタフィールド、35mm判ではニコンFM2である。またデジタル画像も適宜撮影した。

遺物の写真撮影は4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）とプローニーの6×7判（モノクロ）で撮影した。

（星野・谷口）



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

第 2 章 位置と環境

1. 地理的環境

奥ノ田頭遺跡は三重県度会郡南伊勢町贊浦に所在する。南伊勢町は北方に大台ヶ原系の支脈が連なり、町内はその大部分が険しい山地で、谷間および海岸部の僅かな平坦部に集落が散在している。また南には熊野灘が広がり、黒潮の影響もあって温暖多雨な気候となっている。

海岸の殆どは断崖絶壁の典型的なアリス式海岸で、五ヶ所湾、贊浦、神前湾、古和浦湾などが連なっている。古来、この地域は陸上交通より海上交通が盛んであった。野見坂峠、藤坂峠、鉛治屋峰など北の峠越えの道もあったが、物流の中心は海上交通で、これらの峠道は明治期に入つて整備されていった。江戸時代初期、町内の東宮出身で江戸の豪商となつた河村瑞賢が、東廻り海運・西廻り海運の整備を成し遂げたことも、このような地理的環境と無関係ではないのであろう。

また、この地域は地形の影響もあって、歴史的に地震・津波による大きな被害を受けており、いくつかその記録も残っている。贊浦の最明寺にある町指定文化財(昭和45年3月1日指定)の石碑は、宝永4年(1707年)及び嘉永7年(1854年)の両津波による贊浦の被災並びに溺死者の供養と後世のための警告として安政3年(1856年)に当時の庄屋達が境内に建立したものである。

2. 歴史的環境

奥ノ田頭遺跡(1)が所在する南伊勢町は大規模な開発が少ないため、発掘調査例も少なく、遺跡の分布状況は未だ明らかとなっていない。贊浦周辺の遺跡はほとんどが散布地で、災害復旧の工事中に偶然に発見されすでに消滅した遺跡や、遺物のみ伝承されている遺跡、また遺物が散逸した遺跡などもあり、詳細は不明なものが多い。ここでは贊浦および西隣の神前湾内の遺跡を中心に歴史的背景について述べる。

縄文時代に関しては、贊遺跡(2)で中期～後期の土

器片や磨製石斧などが多く出土した。奈屋浦西岸の丘陵端にあるアララ遺跡(3)でも中期～後期にかけての土器が出土している。このアララ遺跡は山崩れによって埋没した縄文遺跡の上に弥生遺跡がある遺跡で、遺物量も比較的多く、熊野灘沿岸の縄文～弥生の遺跡として注目すべき遺跡である。また贊浦沿いの海岸付近のかさらぎ遺跡(4)では縄文後期の土器片が出土している。神前湾内では、前期北白川下層式の土器片が多く出土した神前遺跡(5)の存在もある。発見の経緯も影響しているだろうが、これらの縄文遺跡は内陸部や山地ではなく、海岸線沿いに位置する共通性がある。このように熊野灘沿岸にも比較的広く縄文文化が展開していたと推測できる。

弥生時代の遺跡については、前述の贊遺跡やアララ遺跡で弥生土器片が確認されており、奈屋浦の橋谷遺跡(6)では前期の甕の口縁部が出土している。

古墳時代の遺跡は、弥生時代に比べ、多く確認されている。贊浦には後期の道方古墳(7)があり、土師器、須恵器の高杯が出土したが、開墾のため消滅した。南島大橋北詰遺跡(8)も架橋工事により壊滅したが、高さ約20cmの脚付子持壺と思われる遺物が出土したようである(遺物はその後散逸)。コガレ池遺跡(9)は弥生終末～古墳時代の遺跡で須恵器片が出土している。また神前湾では元神崎遺跡(10)で須恵器蓋杯などが出土している。神前にある仙宮神社には安政年間に付近で発見されたという伝承がある子持勾玉が残されている。さらに五ヶ所湾内の櫻浦には宮山古墳、日和山古墳などの櫻浦古墳群があり、当時の熊野灘沿岸の重要な勢力となっていたと思われる。

古代に関しては贊遺跡が古代の遺物も出土した記録があるが、詳細は不明であり、この地域で古代から中世にかけての明確な遺跡は確認されていない。近世以降、南伊勢町全域は伊勢国度会郡であるが、古代、中世では志摩国に属していた。伊勢神宮に関する書物である『神鳳抄』には、志摩國贊島という記述があり、また『神宮雜例集』や『神宮神領目録』にも贊浦の地名が見られ、贊浦は志摩の国崎などと

並んで伊勢神宮の御賛の調進所であった。また南北朝時代には五ヶ所湾周辺の豪族の愛洲氏や神前浦の水軍である加藤氏などが活躍し、町内各地に城館や狼煙場が造られた。それらは旧南勢町内では15箇所、旧南島町内では3箇所の合計18箇所の中世城館が知られ、そのほとんどが丘陵や尾根上に築かれている。

近世になると度会郡の村々は幕府の山田奉行下に属するものと紀州藩に属するものに分かれたが、南伊勢町の村々は紀州藩丸領に属した。その後賛浦は明治22年の町村制施行により鶴倉村となり、村役場がおかれた。その後昭和30年には鶴倉村と吉津町、島津村、中島村が合併して南島町となり、さらに南島町は平成17年に隣接する南勢町と合併し、現在の南伊勢町となっている。(星野)

【参考文献など】

- ・『南島町史』 南島町史編纂委員会 1985年
- ・『南勢町誌』 南勢町誌編さん委員会 1985年
- ・賛浦・神前浦周辺の遺跡には発掘調査例がなく、記録は三重県埋蔵文化財センター保管の埋蔵文化財包蔵地調査カードの記述による。
- ・『紀伊半島の文化史的研究』考古学編 関西大学文学部考古学研究室 1992年
- ・『三重の中世城館』 三重県埋蔵文化財センター 1976年



第2図 遺跡周辺図 (1:5,000)

第 3 章 遺 構

奥ノ田頭遺跡の層位は、基本的に表土直下に地山がある。表土は急な斜面による崩落も多くあり、厚さは10~20cmほどになる。地山は主に明黄褐色縞である。

平坦面1 調査区南側にある平坦面で、東西約10m×南北約13mの半楕円形をなす、広さ約92m²の調査区最大の面積をもつ平坦面である。周辺の地形から判断すると尾根を平坦に削平したものと考えられるが、調査では明確な整地層は確認できなかった。また不整形な落ち込みが散見されたが、樹木根による擾乱等と思われ、柱穴や土坑などの遺構は一切検出されなかつた。この平坦面1からは複数の土錐や鉄製品などが包含層より出土した。この平坦面1は調査区南端よりさらに南に2mほど広がる。なお、調査区南端付近に近世以降のものと思われる埋甕が確認できる。

平坦面2 調査区北西側の平坦面で、幅約3m、長さは約10mで、広さは約28m²である。調査区以北にも広がるが、なだらかな傾斜があり、完全な平坦面とは言えない。ここでは陶器と土錐が数点出土しただけである。

平坦面3 調査区北東側の平坦面で、幅約2m、長さ約9mの長細い形状で、広さは約8m²であり、今回確認できた平坦面の中では一番狭い。S Z 1を検出した。

S Z 1 L10グリッドの平坦面3上にある落ち込みである。寛永通寶が十枚枚折り重なった状態で出土した(第5図参照)。平坦面3は峰付近の賛浦を見渡せる場所に位置しており、意図的に銅錢がおかれたと考えられる。

S K 2 L9グリッドで検出された、1.2×0.8mの楕円形擂鉢状の土坑である。S Z 1に近く、旧山道の峰付近にある。遺物は出土しなかつたが、炭化物が確認できた。

S D 3 賛浦方面の旧山道の構と考えられる。幅は約40cmで、深さも10cm程で深くはない。周辺より土錐が出土している。

S D 4 S D 3と同様、旧山道の構と考えられる。遺物は出土しなかつた。

S R 5 賛浦から東宮を結ぶ旧山道と考えられる。幅は約1.5~2.2mと変化する。ここからは陶器や土錐等が数点出土しているが、平坦面1からの崩落土と考えられ、遺構に伴うものとは考えにくい。この旧山道は、明治44年の鶴倉村誌の地図に記されていく「二等道路」であると思われる。

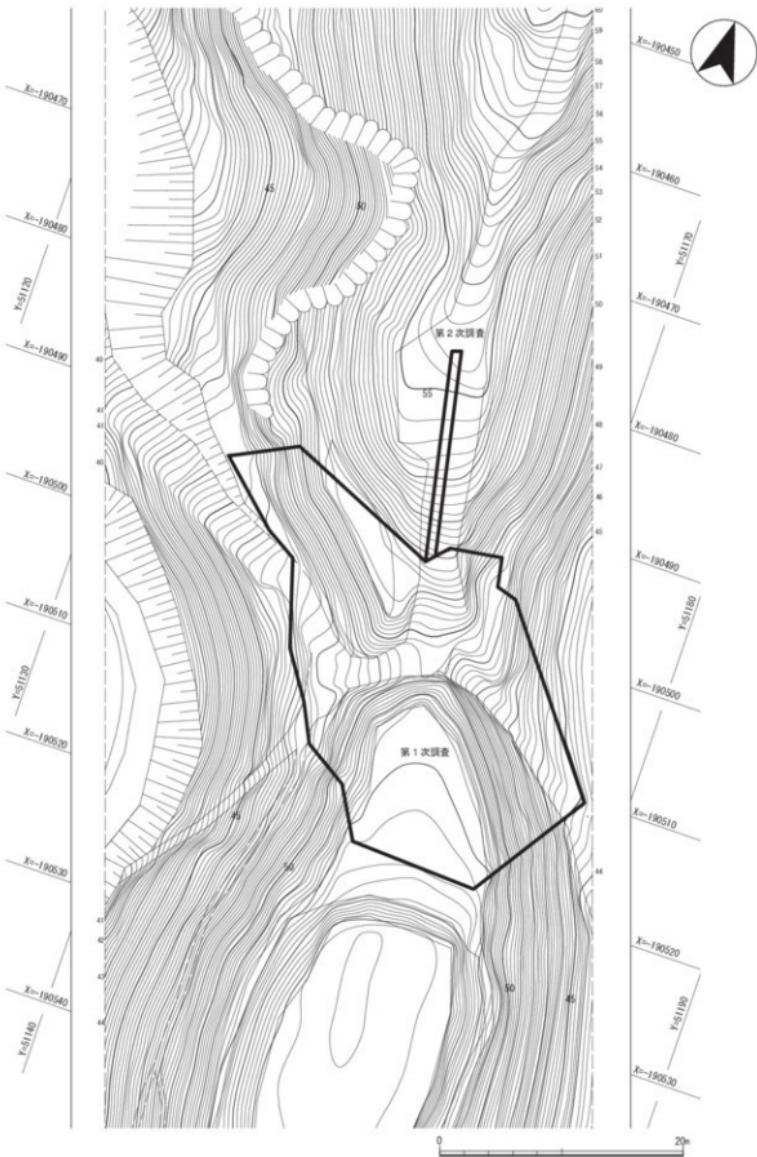
S R 6 M・N、6・7グリッドで検出された幅約1mの旧山道である。S R 5から分岐する旧道と考えられるが、前述の村誌地図には見当たない。

(星野)

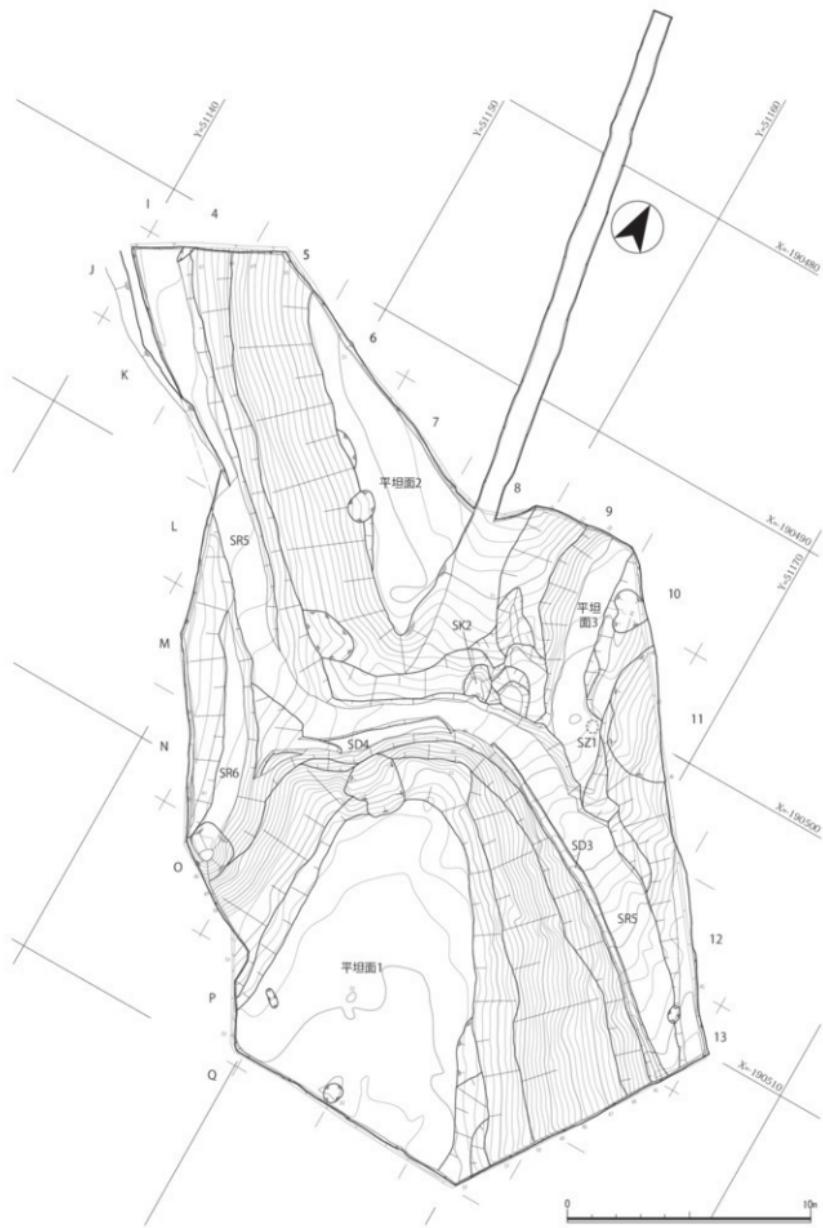
【註】

①大野菊松「三重県度会郡鶴倉村誌」「三重県郷土誌 第29巻」

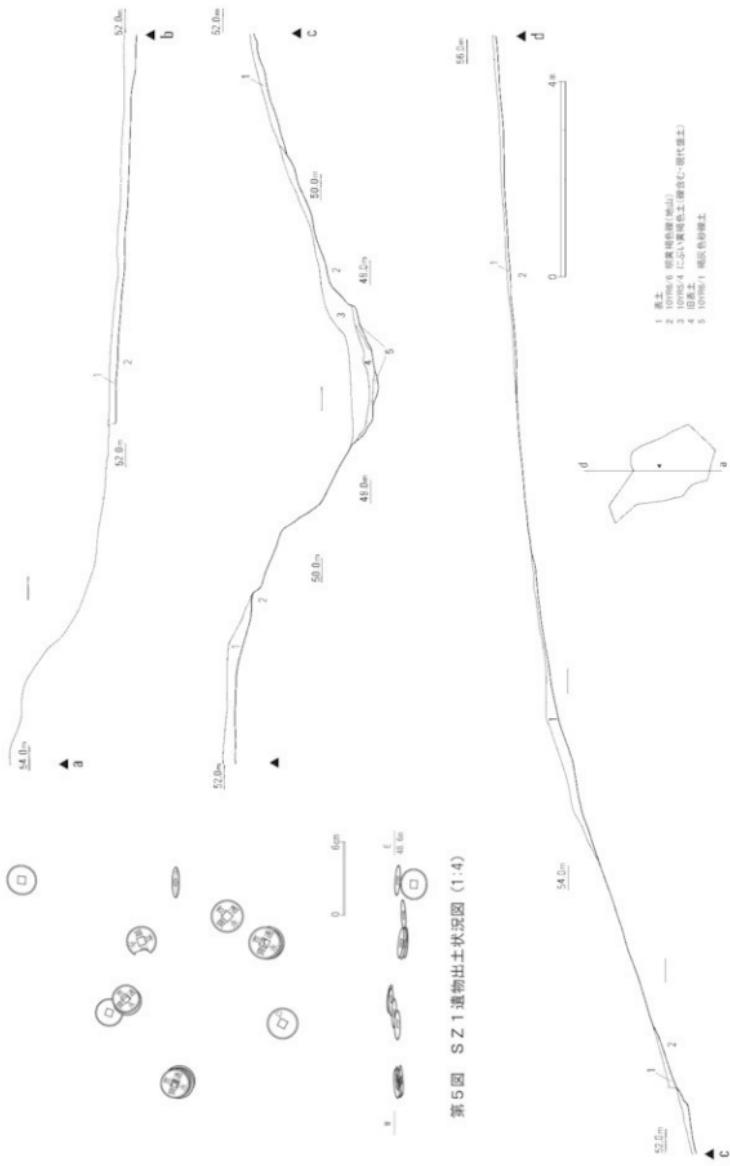
(日本図書館協会 2005年)



第3図 調査前測量図 (1:400)



第4図 遺構平面図 (1:200)





第7図 平坦面2東西土層断面図 (1:100)



第4章 出土遺物

奥ノ田頭遺跡の発掘調査で出土した遺物はコンテナパット2箱(約2.0kg)で、調査面積に比較すると非常に少ない。遺物の内訳は土器類・土製品類・石製品類・金属製品類である。今回の調査では遺構ごとにまとまった出土資料が少ないため、時期および器種・器形ごとに分類して報告する。遺物個々の詳細については遺物観察表を参照されたい。なお、瀬戸美濃系陶器については、「愛知県史」の編年により、肥前窯磁器については、「江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」の編年による。

中世の遺物

1は常滑産甕の体部の小片である。2は常滑産甕であるが、周辺を荒く投打して作られた加工円盤と考えられる。

近世以降の遺物

土器類（3～15）

3は土師器小皿の小片である。4～10は陶器で、4は美濃産の丸皿で内面に重ね底がみられ、5は瀬戸産の楕でケズリ出し高台である。いずれも第2段階で16世紀中葉のものである。6は瀬戸産と思われる手挽である。7は体部小片の出土であるが、近世常滑産の甕であろう。8は瀬戸美濃産の徳利で、大窯期のものである。9は美濃産の筒型香炉で、第7小期にあたり18世紀中葉である。10は肥前産の三島手大鉢で、17世紀後半から18世紀初頭のものである。11～14は磁器である。11は瀬戸の広東碗で、第10小期にあたり19世紀前半のものである。12は肥前の広東楕で18世紀末から19世紀前葉のものである。13と14は肥前のくらわんか楕で、波佐見系のものである。13の文様は網目であり、14の文様は梅で、いずれも18世紀中葉から後葉のものである。15は肥前産の蕃麦猪口で、文様は型紙摺りである。明治20～30年代のものである。

土製品・石製品類（16～29）

16～27は土鍤である。全長3.0cm前後、最大幅2.0

cm前後、孔径1.2cmの素焼きの土鍤が、計11点とその破片が散片出土している。26を除いて平坦面1およびその崩落土から出土する。個体により磨滅するものがあるが、概ね胴中央に稜線をもつ、算盤珠形のものが多い。民俗資料との比較をしてみると、伊勢海老を刺網で捕獲するときの漁網に近似していて、民俗学的に言うところの「エビアミ」の鍤と思われる。エビ漁刺網は、伊勢海老が生息する岩礁周辺で張られるため、一般的な細長い棒状形ではなく、算盤珠形をしていると言われる。

26のみは平坦面2の西斜面裾から出土しており、土鍤形状も、孔径こそ同じ寸法であるが、胴幅よりも長さ1/3ほどで、いわゆる棒状土鍤の形状である。

28・29は砥石である。28は凝灰岩、29は泥岩で、29の使用面の幅10.9cmと非常に薄い。

金属製品類（30～51）

30は鉄皿で、口径の約1/3を欠くものの、比較的状態の良い、丸底の小皿である。中世の資料であるが、津市芸濃町の下川遺跡で同形状の皿が出土している。⁸31は鉄製品ではあるが、釘が曲がったものか、錐であるか現況では不明である。32と33は寛永鉄錢とおもわれるが、32は40と41に、33は47と48にそれぞれ接まれ付着した状態で出土した。

34～50は寛永通寶で、32～49は平坦面3のS Z 1からまとめて出土した。50は平坦面1の北法面よりの出土である。51は文久永寶で旧道の包含層より出土した。

（大川・星野・谷口）

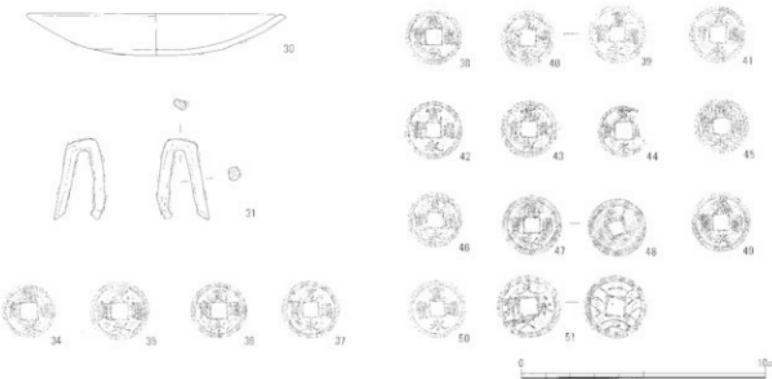
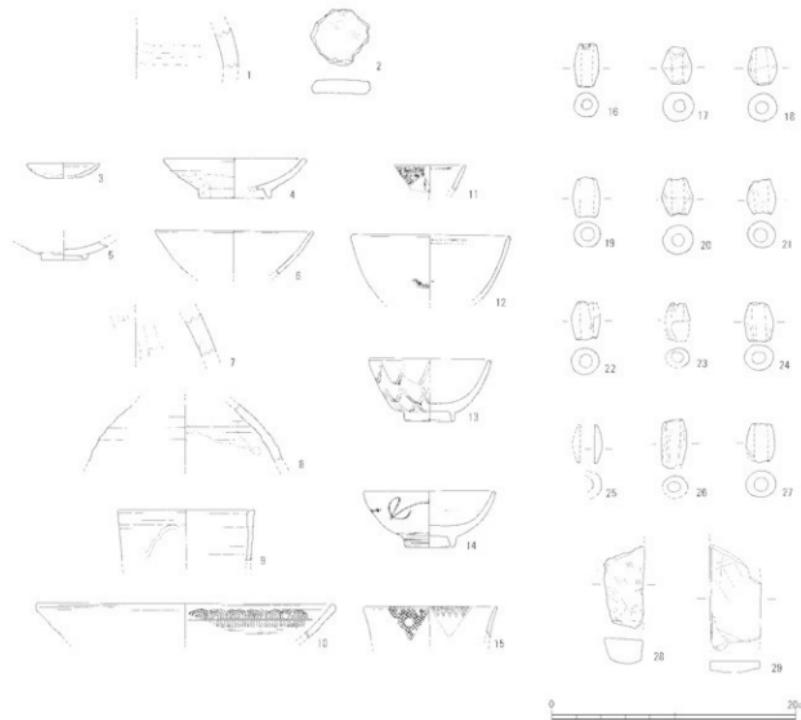
注】

①愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 中世・近世 瀬戸系窯業2』（2007年）

②江戸陶磁器研究グループ『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』（1996年）

③土鍤に関しては、海の博物館学芸員の平賀大蔵氏にご指導していただきいた。

④三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』（1990年）



第9図 出土遺物実測図 (1:4, 30~51は1:2)

番号	実測 番号	種類 器種等	アリフ等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	003-05	陶器 壺		平坦面1 包含層			密	外:オリーブ緑±5V4/3 内:ぶい焼 2.5V5/4	体部小片	常滑産
2	003-06	陶器 壺 (加工内鉢)	レ7	S85			密	外:黒灰 10V4/1 内:ぶい焼 2.5V5/3	常滑産 重さ30.11g	
3	003-01	土師器 小壺	南西斜面 表探	(口)5.9(高)1.15	アリフ→S2アリフ		密	橙 2.5V8/6	全体2/12	
4	004-02	陶器 壺	レ7	S85	(口)11.8(高)3.3 (高台)5.8	アリフ→貼付アリフ	密	釉:灰オーリーブ 5V6/2 素:灰黄 2.5V6/2	口縁部3/12 底部2/12	美濃産
5	003-07	陶器 梗	レ7	S85	(高台)3.8	アリフ→貼付アリフ	密	釉:灰白 5V8/2 素:淡黄 2.5V8/3	底部2/12	瀬戸産
6	004-01	陶器 梗	Q11	包含層	(口)13.0	アリフアリフ	密	灰白 5V7/2	口縁部2/12	瀬戸産
7	003-04	陶器 壺		平坦面2 包含層			密	外:黒灰 10V5/1 内:橙 2.5V6/6	体部小片	常滑産
8	004-03	陶器 壺 (被削形)	W11	包含層			密	釉:黒墨 10V2/2 素:淡黄 2.5V7/4	瓶部3/12	瀬戸美濃産
9	003-08	陶器 香炉	14	平坦面2	(口)11.2	アリフアリフ	密	釉:オリーブ緑 2.5V4/6 素:灰黄 2.5V7/2	口縁部2/12	美濃産
10	005-01	陶器 舟	レ9	包含層	(口)24.6	アリフアリフ	密	釉:黒墨 10V2/2 素:黒灰 10V5/1	口縁部2/12	肥前産
11	004-05	磁器 梗		平坦面1 包含層			密		染付	口縁部小片
12	004-04	磁器 梗	Q11	包含層	(口)13.0	アリフアリフ	密	灰白 5G8/1	口縁部1/12	肥前産
13	005-02	磁器 梗	N11	包含層	(口)10.0(高)5.1 (高台)4.1	アリフアリフ→削出高台	密	釉:明緑灰 2.5G6/1 素:灰 2.5V8/1	口縁部5/12 底部6/12	肥前産
14	005-03	磁器 梗	W9	平坦面1 包含層	(口)10.9(高)4.6 (高台)4.1	アリフアリフ→削出高台	密	釉:明緑灰 2.5G6/1 素:灰白 10V8/1	口縁部5/12 底部6/12	肥前産
15	004-06	磁器 蓋麦口壺	Q11	包含層	(口)11.0	アリフアリフ	密		染付	口縁部1/12
16	002-01	土製品 土鍋	Q9	平坦面1	3.6×2.0×2.0 孔径0.95		密	にぶい焼 7.5V7/4	ほぼ完存 重さ11.13g	
17	002-02	土製品 土鍋	Q11	平坦面1	3.1×2.5×2.5 孔径0.9		密	橙 2.5V7/6	全体11/12	重さ12.74g
18	002-03	土製品 土鍋	Q12	平坦面1	3.1×2.4×2.4 孔径1.05		密	にぶい焼 7.5V8/4	ほぼ完存 重さ12.11g	
19	002-04	土製品 土鍋	W12	S85	3.2×2.2×2.2 孔径1.15		密	にぶい赤墨 5M5/4	ほぼ完存 重さ10.91g	
20	002-05	土製品 土鍋	N12	S85	3.1×2.6×2.6 孔径1.05		密	にぶい橙 7.5V7/4	ほぼ完存 重さ12.51g	
21	002-06	土製品 土鍋	P9	包含層	3.1×2.5×2.5 孔径1.1		密	にぶい黄橙 10V7/3	全体10/12	重さ9.83g
22	002-07	土製品 土鍋	P11	平坦面1	3.3×2.3×2.3 孔径1.05		密	黄灰 2.5V4/1	全体8/12	重さ12.31g
23	002-08	土製品 土鍋	Q10	平坦面1	3.15×2.0×2.0 孔径0.95		密	灰赤 2.5V6/2	全体6/12	重さ8.43g
24	002-09	土製品 土鍋	N12	S85	3.2×2.3×2.3 孔径1.1		密	にぶい黄橙 10V6/3	全体11/12	重さ10.33g
25	002-10	土製品 土鍋		平坦面1	3.25×2.5×2.5 孔径1.2		密	灰白 5V7/1	全体5/12	重さ4.23g
26	002-11	土製品 土鍋		平坦面2	3.95×2.0×2.0 孔径1.1		密	浅黄橙 10V8/4	全体9/12	重さ10.12g
27	002-12	主製品 土鍋	Q9	表探	3.05×2.35×2.35 孔径1.15		密	橙 2.5V7/6	全体10/12	重さ11.52g
28	003-02	石製品 砥石		平坦面3 包含層	6.7×2.7×2.05					重さ60.86g 磨灰岩
29	003-03	石製品 砥石	29	包含層	8.6×4.1×0.9					重さ48.73g 砂岩
30	001-01	鉄製品 鉄皿	011	法面 包含層	(口)10.6(高)1.7				全体4/12	重さ51.89g
31	001-18	鉄製品 鉄か鉢	09	平坦面1 断面0.5~0.6×0.5					全体10/12	重さ6.38g 伸延長約7.6cm 寛木通寶 実測図なし 40と41に接続されて出土
32		鉄製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶 実測図なし 40と41に接続されて出土
33		鉄製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶 実測図なし 47と48に接続されて出土
34	001-03	銅製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶
35	001-04	銅製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶
36	001-05	銅製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶
37	001-06	銅製品 貨物	L10	平坦面3 S21					ほぼ完存	寛木通寶

第1表 出土遺物観察表1

番号	実測番号	種類 器種等	「リリ」等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
38	001-07	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
39	001-08-01	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
40	001-08-02	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
41	001-09	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
42	001-10	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
43	001-11	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
44	001-12	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					一部欠損	寛永通寶
45	001-13	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
46	001-14	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
47	001-15-01	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
48	001-15-02	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶か
49	001-16	銅製品 貨幣	L10	平坦面3 SZ1					ほぼ完存	寛永通寶
50	001-02	銅製品 貨幣	W9	北法面 包含層					ほぼ完存	寛永通寶
51	001-17	銅製品 貨幣	18	包含層					ほぼ完存	文久水寶

第2表 出土遺物観察表2

出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

遺物番号 本報告書における出土遺物掲載番号である。

実測番号 実測段階の登録番号である。

種類 「刃物器」「陶器」「鉄製品」などの区分を表す。

器種 各遺物の種類を表す。

グリッド 調査時に設定したグリッド名を記した。

出土位置 遺物の出土した構造などを記した。

法量 (cm) 遺物の大きさを示す。(D) は口縁部径、(底) は底部径、(高台) は高台部径、(高) は最高を示す。なじ数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 主な特徴を示した。「A～B」はA後にBが施されたことを示す。

胎土 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 その遺物の代表となる色調を記載した。表記は『新版標準色帖』に従る。

残存度 その部位を12分割した際の残存度を示した。

特記事項 遺物の特徴となる事項を記した。

第 5 章 結 語

今回の奥ノ田頭遺跡の発掘調査によってあきらかになったこと、また推測できることを整理して記述する。

当遺跡が分布調査で確認されたときには、石器と考えられるものが採取されたため、縄文時代の遺跡が想定された。しかし今回の調査では縄文時代の遺構や遺物等は一切確認できなかった。第2章でも記述したが、贊湾周辺の縄文遺跡は沿岸部に多い。しかし海岸部には近いが、標高50m付近に位置する当遺跡に縄文時代の遺構や遺物が確認できる可能性は低いのではないだろうか。また、当初に想定された中世の城跡あるいは館跡と断定できる遺構・遺物は確認できなかった。

当遺跡は、贊浦と奈屋浦に挟まれた尾根上に位置する。調査の結果、その尾根上を造成した平坦面と、贊浦から東宮への旧山道およびこれに伴う側溝が確認できた。また、東宮方面から贊浦へ山道を進むと贊浦集落が見下ろせる位置にも平坦面が作られてお

り、ここには寛永通寶が十数枚折り重なって出土した。これらの銅銭は意図的に置かれたものと考えられる。当時人々がこの峠付近の往来時の安全を祈願する場所であり、これらの銅銭はお供え銭と考えられるだろう。

さらに平坦面1を中心、土鍤が十数個出土する。漁に使用された土鍤が標高45~52m付近で見ついている。地元の方によれば、平坦面1は「のんし（のろし台の意味）」と呼ばれていたようである。

平坦面1以南には、高低差のある平坦面などが続くことが調査前の踏査からわかっている。中世へ通る遺構などは今回調査区よりも南側にある可能性が高い。

平坦面2から北へ尾根を上った地点からは、贊湾への眺望がきき、風向きや潮流の変化がよく観察できることから、近世を中心に漁への船出判断をする“日和山”的な地点であったものと思われる。

(星野)



調査前風景(北から賛浦方面)



調査区より賛浦を望む(北から)



平坦面 1 調査前(北から)



平坦面 2 調査前(南から)



平坦面 3 調査前(南から)

写真図版 2



平坦面 1 調査後(北から)



平坦面 2 調査後(南から)



平坦面 3 調査後(南から)



第 2 次調査後全景(南から)

写真図版 4



旧山道 S R 5(賛浦方面・西から)



旧山道 S R 5(東宮方面・東から)



平坦面 1 東斜面肩部(北から)



平坦面 1 中央付近(東から)



平坦面 1・2 間の鞍部埋土(西から)



平坦面 1 作業風景(北から)

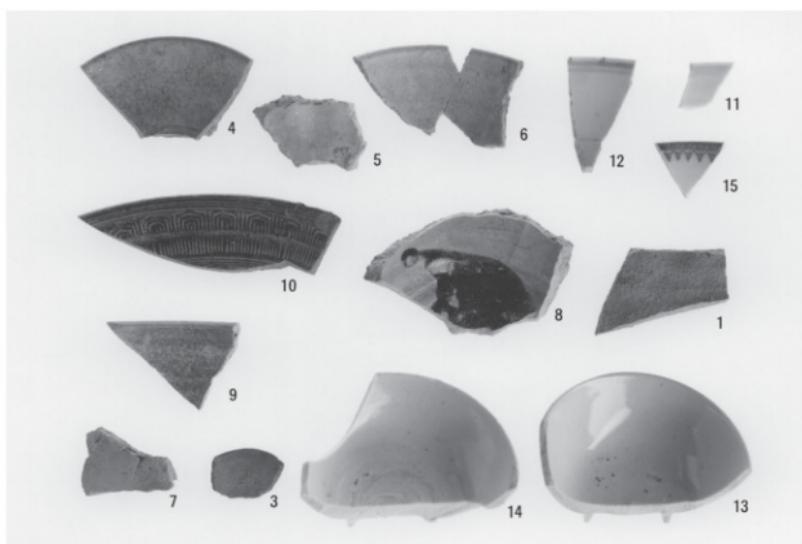
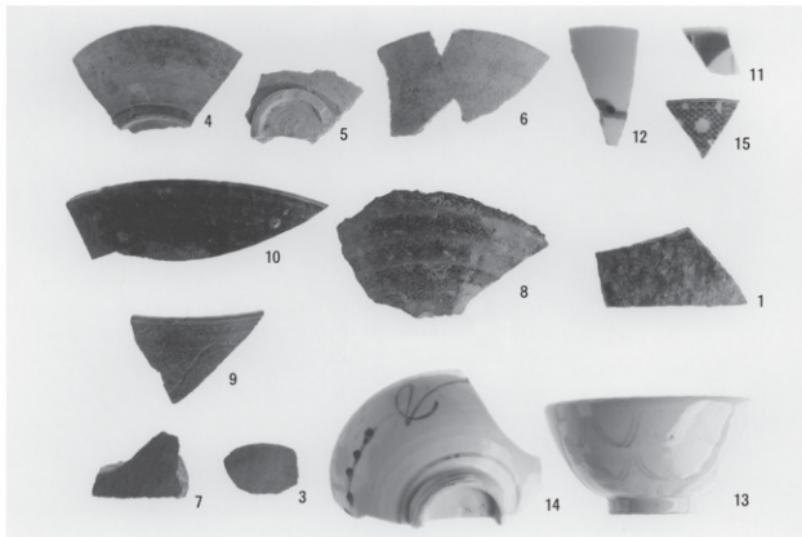


S Z 1 出土状況(南から)



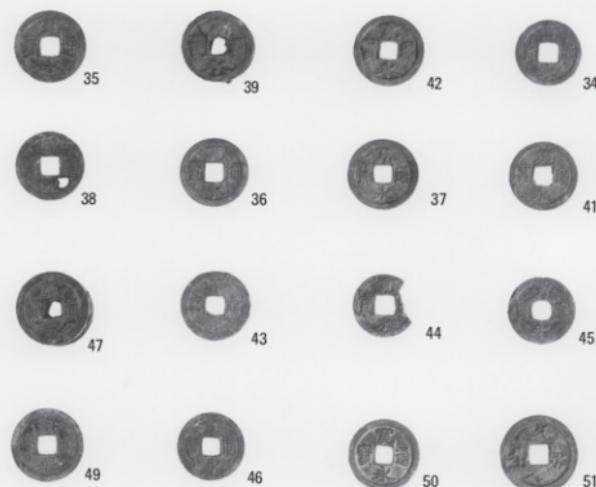
S Z 1 出土状況

写真図版 5



出土遺物 1

写真図版 6



出土遺物 2

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告345
奥ノ田頭遺跡発掘調査報告
2014（平成26）年2月
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
